

# 「多様性のよさが感じられる放送を」

**名** 古屋市でCOP 10 が開催された。  
メディアは何をどう伝えたのか。

生物多様性など環境問題は「国」と「国」の  
関係を避けられない。メディアは「公益・国益」  
のバランスをどうとるべきなのか。

支援実行委員会のアドバイザーとして  
COP 10 の開催を影で支えた、  
香坂玲氏にメディアが果たすべき役割について  
聞いた。

(このインタビューは 2010 年に行いました)



## 香坂 玲

国連大学高等研究所客員研究員  
名古屋市立大学大学院経済学研究科准教授

### プロフィール

1975 年生まれ。名古屋市立大学大学院経済学研究科准教授。専門は環境経済学、生物多様性。2006 年からモントリオールの生物多様性に関する国連事務局で勤務。2008 年から現職。国連大学の客員研究員も兼務し、里山の評価プロジェクトなどに参画。2011 年に名古屋で開催された「COP10」では支援実行委員会アドバイザーを務めた。

### 公益と国益の間で揺れる放送

—— 2009 年 10 月に名古屋市で生物多様性条約締約国会議 (COP10)<sup>\*1</sup> が開かれました。振り返って如何ですか。

遣伝子組み換えの農産物による被害の補償などを定めた「名古屋・クアラルンプール補足議定書」が採択され、また 2020 年までの生物多様性の保全目標「愛知ターゲット」、生物資源の利用と利益配分などを決める「名古屋議定書」については、先進国と途上国の意見が対立しましたが、双方の努力や譲歩によってなんとかまとまりました。開催地「愛知」「名古屋」の名前を残すことが出来てほっとしています。

—— 会議は盛んに報道もされました。どうご覧になりましたか。

特に新聞で顕著だったのですが、会議前は「自然を守ろう」「生き物を大切にしよう」という報道を盛んにしていたのに、いざ会議が始まると「先進国と途上国の利益配分はどうなる」といった話を中心になってしまった感じがします。報道に接して戸惑った人も多かったのではないのでしょうか。つまり「自然を守ろう」という「公益」を盛んに言っていたのに、会議が始まると「利益配分」という「国益」が議論の中心になってしまったのです。公益と国益とどちらを優先させるのか、難しい課題だと思います。

最近、サッカーワールドカップの開催地決定を巡って、公益と国益について考えさせられる出来事がありました。投票を巡って賄賂を受け取っていた理事がいることを、イギリスの公共放送、BBC<sup>\*2</sup> が報道したのです。ところが、

報道された二人の理事はイギリスに投票するつもりだったことが分かり、一部の愛国的な人々から「報道によってイギリス開催が遠のいた」と非難の声が上がりました。

私は、報道、特に公共放送は常に公益の側に立つべきだと考えています。日本では愛国的な声が上がることが少ないですが、公益と利益のバランスをどう取るか、公共放送にとつては大きな課題だと思います。

### 放送と成熟した市民社会

——香坂さんはドイツやカナダなど海外で研究を長くされていましたが、海外のメディアは環境問題をどう伝えていくのですか。

ドイツにはARD、ZDF<sup>※3</sup>という二つの公共放送局があります。長い間独占的な地位にあつたため市民に対する影響力は強く、特に夜8時に放送されているニュース番組は視聴率が高く、「8時に他人の家に電話をするのは失礼だ」とも言われるほどです。

そのドイツでは、市民の側も放送を利用して環境問題を伝えようという意識が高いのが特徴です。例えば原子力発電所から核廃棄物を搬出するときは、鉄道に反対派の人々が寝転がり、輸送を遅らせようとするのが年中行事化しています。この様子は必ずニュースになります。

また、私がとても驚いたのは、数年前に洪水が起きたときの報道です。その年の2回目の洪水被害が出たとき、被害の様子を伝えるリポーターのすぐ後ろにNGOの横断幕が掲げられていて、「この洪水は温暖化のせいで起きた！」と書かれていました。洪水が起きる前から横断幕を用意していたのです。賛否はあると思いますが、報道を利用しようという成熟したNGOのしたたかさを感じました。日本

のNGOはまだそこまではいっていない印象があります。

——カナダではどうでしたか。

カナダで印象的なのは『残酷なカメラ』という番組です。ディズニー映画で、次々にネズミが海に飛び込んでいく話がありました。『残酷なカメラ』の検証によって、それがまったくの作り事であることが明らかになりました。また、マイケル・ジャクソンが飼っていたチンパンジーのその後を追う、という企画も放送されました。商業主義に対抗し、映像を映像によって検証する、というのは公共放送の大きな意義だと思います。ただ最近ではYouTubeなど、映像の質が高くないために検証が難しいものが増えていることは気がかりです。

——去年話題になったドキュメンタリー映画『ザ・コーヴ』<sup>※4</sup>を思い起こさせますね。

『ザ・コーヴ』については、日本などでさまざまな批判がありました。『弱者の立場』で「ゲリラ的に撮影する」スタンスを明確にするなど、戦略上、感心させられるところも少なくありませんでした。

『ザ・コーヴ』問題で痛感したのは、結論のみに対して反論することの不毛さです。相手には相手の論理があつて、結論に至るまでは論理の積み重ねがあります。例えば、西洋の人には、「動物を殺す」ことよりも「動物に対して痛みを与える」ことへの批判があります。つまり日本のイルカ漁に対して、殺すから悪いのではなく、痛みを与える殺し方をしてるので悪い、という理屈になるのです。そうした論理を理解して、そこに向けて反論をしていく努力をする必要があると思います。短い時間でそうした反論は難

※1「COP10」  
P115参照

※2「BBC」

1922年に放送を開始したイギリスの公共放送局。財源はテレビ所有者から徴収する受信許可料。無許可の受信には最高1000ポンドの罰金が課される。この制度により、政府や企業の方に屈しない放送をおこなうとされ、その報道姿勢から世界の放送の範とも呼ばれている。第二次世界大戦中もイギリス軍を「わが軍」ではなく「イギリス軍」と呼び、アメリカ同時多発テロ事件を「テロ」ではなく「攻撃」と報道した。

※3「ARD」と「ZDF」  
P32参照

※4「ザ・コーヴ」  
2009年に公開されたアメリカのドキュメンタリー映画。和歌山県太地町でおこなわれているイルカ追い込み漁を批判的に描き、市民団体らによる抗議活動が相次いだ。水中マイクや岩に偽装した高性能カメラで盗撮したことも批判が集まった。第82回アカデミー賞長編ドキュメンタリー映画賞を受賞。

しいので、じっくりと長い時間をかけて反論・検証をしていくメディアの存在が欠かせないと感じています。

### 多様性のよさが感じられる放送を

——話をCOP10に戻します。地域での放送についてはどうご覧になりましたか。

名古屋が開催地に決まった2年前から、継続的に報道がありました。特に東海地方は、愛知県の都市・岐阜県の山・三重県の海など、様々な地形・自然があつて、多様性を伝えるにはうってつけだと思います。そういった場所から放送することで、生物多様性を分かりやすく伝えられたと思います。そのおかげもあつて、海外からの会議参加者が、タクシーの運転手から「今日の会議はどうなるのですか」と話しかけられたことに感銘を受けていました。私自身も、近所に住むお年寄りから「利益配分はどうなるのかね」と聞かれ、COP10が市民の間に浸透していることを実感しました。

——今後の課題としてどんなことを感じていますか。

今回の会議では、国や自治体などがアクター（主体）になることが多かったのですが、これから対策が進むと、NGOや企業がアクターとして浮かび上がってくるのが想定されます。特に企業の取り組みについて、公共放送としてどのように報道をするのか、難しい場面も出てくるのではないのでしょうか？もう一つは若い世代への働きかけです。会議期間中は、私もよく街で声をかけられました。一方で大学内での反響はほとんどありませんでした。

——若い人に生物多様性の大切さを伝えるにはどうしたらいいでしょうか。

いきなり生物多様性といってもうまく伝わりません。個人的には「旅」がキーワードのような気がします。旅をすると、世界にはいろいろな人がいて、いろいろな生活があることが分かります。まずは多様性を感じてもらうことが大切です。NHKにも多様性を感じられるような放送を期待しています。

### 放送の多様性のために

——チャンネル数が増える一方、似通った番組が増えていくという指摘もあります。そうしたなかで、番組の多様性を確保するためにどうすればいいのでしょうか。

大学で若者と接していて、どうすれば彼らが関心を持つようになるのか、試行錯誤しています。彼らの言葉の「ググる」といった、インターネットで検索する行為自体を問題視することはないと思いますが、コピーペースト文化に慣れている世代に、レポートは自分の言葉で書いたり、考えたりしていくことの重要性を知ってもらうようにしていきます。

問題は、情報不足ではなく、情報が出来上がるプロセスや取捨選択などがポイントだと思います。テレビ番組は、いきなり完成品を見えますが、若者には、台本のできるプロセスやスタジオでいろいろな人が考えている様子など、作り上げるプロセスを見てもらうほうが教育効果は高いかもしれません。

あるいは情報量を減らして番組を見ろという方法もあります。例えば、米国での文化人類学のクラスは、先住民の人々の生活を紹介している番組を、音を消して映像だけで見て



© COP10 JAPAN2010

議論する方法があるようです。ナレーションは正しいものと鵜呑みにしてしまうことを防いで、学生たちが映像を見て、そこから情報を読み取るうとする意欲を出してもらうようにする工夫とも言えます。

また、視点の多様性を養うという意味では、朝のBSで放映している世界各国は大切な番組の一つです。日本のニュースは、あるテーマが加熱するとそれが繰り返し集中して放映される傾向がありますが、そのような期間、他の国で、何が一番のニュースとして放映されているのか、参考となります。

例えば、日本は国連の安保理の常任理事国に入るように各国に働きかけています。日本はこれまで政府開発援助や技術移転などで貢献してきたので、その資格はあるという見方もできます。ただし、気になるのは、NHKのニュースで、中東和平、イラクやアフガニスタンでの平和維持と復興、アフリカの貧困、熱帯雨林など世界規模での生態系や気候変動の問題などについてのニュースが少ないことです。国連の安保理に関わっていくというのは、そのような問題に関心を持って、より積極的に関わっていくということと不可分でしょう。必ずしも軍事力を伴うわけではあり

ませんが、少なくとも安保理で活動していくということは、まだ出口が見えてこない、暗くなるような世界の現実のニュースとも付き合うことになることも忘れてはなりません。

個人的には語学のラジオの学習番組も楽しみや柔らかさが優先されて、「硬派」の番組が減り気味な

のは残念です。今後も「正義論」のブームのように、堅い議論に対する需要はあると思います。

### インタビューを聞いて

自然界では、さまざまな生き物が互いに依存しあいながら生きています。生物多様性を失うと、森は、海は、里は、環境変化に対し脆弱になります。また、同じ種の中でも遺伝子の多様性を失うと、それだけ絶滅の危険性も高まります。

香坂さんへのインタビューを通じて、放送も同じではないかと考えました。さまざまな形態のメディアがあり、放送局があり、番組があるべきです。

そしてそこで働く人たちは多様であるべきです。多様な番組を制作することで、視聴者の関心に応え、放送文化を豊かにする。放送の多様性を確保することは、公共放送の大きな使命の一つだと強く感じました。

報告 中部支部 浅野 光成